

# あつまろらい(志原川の環境を考える団体)

熊野市と御浜町を流れる志原川は、長さ7キロ余りの小さな川です。河口近くには葦原が広がり、産田川と合流して七里御浜に注いでいます。紀南地方ではバードウォッチングに最適な場所とされ、豊かな自然に恵まれています。ゴミに悩まされた時期もあったようです。志原川の環境を考える団体「あつまろらい」が、環境改善に取り組んでいます。



川舟で葦原の中を進む

## お問い合わせ

「あつまろらい」  
(志原川の環境を考える団体)  
御浜町志原1995-4  
TEL 05979-2-1957  
(代表 清水 鎮一さん)

七里御浜沿いの国道42号から望める志原川。河口付近は熊野古道伊勢路・浜街道の一部で、この道に峠越えはありませんが、川を渡る際に高波にさらわれた人もいて、志原川尻の巡礼供養碑が往時の困難を物語っています。現在は橋が架かり、高波などの被害を防ぐ樋門が整備されていますが、自然環境は大きく変わりました。流域の自然を軸に、河川改修工事が共存する形を呼びかけて活動しているのが「あつまろらい」です。実際に川舟下りを体験しながら、主力メンバーとして活動する清水 鎮一さん、湊 秀司さん、丸山 俊明さんにお話を伺いました。

——志原川下流は両岸をヨシが茂り、秋の景色は風流ですね。

清水：使用する川舟は昔、この周辺で農家が米などを運ぶのに使っていたものを再現したものです。魯ではなく竹竿一本で舟を操ります。志原川は流れが緩やかで水深が浅いため、水面を竿で突いて進むんです。川舟下りの体験では、お客さんにも操縦してもらっていますよ。この規模で葦原が残っているのは、紀南地域でもここぐらいのようです。過去25年間で約170種の野鳥が観測され、コウノトリも飛んでいましたが、環境は年々変化し、減ってきました。川縁に群生するハマナツメの木は御浜町の天然記念物に指定されています。

——志原川の豊かさを感じます。幹線道路からは見えないところを流れているのでわかりませんでした。

丸山：川の周囲に湿地と農耕地が広がっていて、河口付近で産田川と合流し、大前池に出ます。50年ほど前まではシジミ貝がたくさん採れ、魚類、貝類、藻類が豊富で、ハゼやカワエビなども生息していましたが、今ではほとんど見られなくなっています。シジミ貝を復活させることが、活動の目的の一つで、環境改善と調査を行っています。

清水：人々の生活が成り立つ上で、魚や水辺の鳥、昆虫や小動物なども住みやすく共存できる美しいふるさとの風景を守っていきたいと、平成3(1991)年に

「あつまろらい」を発足しました。豊かな環境にしようとして、翌年から志原川河口のゴミ拾いを始めました。畳が捨てられていたり、テレビが流れてきたこともあるんです。清掃活動は今も継続し、年2回 春と秋に行っています。このよさを

知ってもらおうと、川舟下りのツアーを企画し、地元中学生たちにも楽しんでもらいました。組み立て式の「川原屋」という建物で、「川の健康とは」の講座などを行い、水辺では胡弓やバイオリンのコンサートも行ってきました。その中で、従来ある川の流れを活かして治水と環境を両立させる「近自然河川工法」を学びま

した。気候や地理的条件の中で、大気、水、土壌の働きと生態系の関係を本来の自然に近づけるという概念です。

——いろいろな河川整備計画に要望書を提出されているんですね。

丸山：志原川河口は、熊野灘の高波で砂利が動かされ、河口閉塞が起きてしまいます。「港を切るのが大変だった」とよく聞かされました。水が流れにくい状況で、大雨の度に流域が浸水したり、田んぼでは高波による塩害が起っていました。そういったことも踏まえ、河口対策には河川の深みや浅瀬、流れ方などを活用して計画して欲しいのです。

湊：河口付近にはウナギ漁のスポットもあります。ウナギを捕まえるための筒を川に沈めて、引き上げる漁法で、これもイベントにしました。生物が存続できる環境を守り、子どもたちには自然の中で遊ぶ習慣をつけてほしいと、日頃から話しています。

——川舟からの目線は、普段と違った景色に出会えます。またエンジンなどの音がなく、静かな自然のままを体感できます。水辺から環境について考え、豊かな志原川の流れを次世代に受け継ぐと活動しています。

インタビュー……中村元美



竹竿一本で舟を操る体験



シジミ貝の調査を行っている



「川原屋」でのコンサート\*



清掃活動のツアーを年2回\*



左から湊 秀司さん、丸山 俊明さん、代表の清水 鎮一さん

\*印の写真は取材先から提供していただきました